

自分の言いたいのは何か

止まって、反対方向に、
足が逃げて行きそうな思いになった。

「いや、勇気だ！」

僕は、視線が彼女から、それそうになるのを、
懸命に抑止して、じっと一生懸命に、
彼女の方に顔を向けて、
じっと見ながら前進した。

彼女の前まで来た。

僕は今にもガタガタ来そうだ。

僕の弱虫を、彼女に知られて、
嫌われるのが怖くなった。

それを隠すのに、必死になって、
視線を彼女の目に合わせして、
懸命に僕は「対決」していた。

「立ち止まって、話しかけよう。」

「止まれ！」

僕は自分に言ったが、足が止まらない。

そのまま、スタスタ、
ベンチに座る彼女を通り過ぎていく。